

一七八九年フランス人権宣言のテルミノロジーとイコノロジー

石井 三 記

「義務とか権利とか、できればそういう言葉を出さないでほしい。」

（二〇一三年ミリオンセラー小説の一節）

「われわれは自分自身を再生したいと欲している。だから、権利の宣言が何としても必要なのだ。」（一七八九年八月一八日ラボー・サン・テ

チエンヌの議会演説）

はじめに

一 フランス革命初期の人権宣言ポスターの分析

二 人権宣言に用いられるテルミノロジー

三 革命期の公民教育用すごろく遊びの絵解き

四 フランス革命期の辞典類に見られる新たな語義

おわりに

はじめに

ユネスコの世界記憶遺産にも登録されている一七八九年フランス人権宣言は、その歴史的モニュメントとしての意義もさることながら、現在のフランス第五共和国憲法下の憲法院において裁判規範として用いられている現行法でもある。したがって、ある意味で、わが国の従来の人権宣言研究が憲法学の領域でなされてきたことも当然なことのように思われる。ところで、フランス人権宣言というと、世界史などの教科書参考書でおなじみの絵画が想起される。じつは、この図にある条文は、一七八九年時点のものであり、人権宣言がその二年後のフランス最初の成文憲法冒頭に置かれた際のものとは細部において異なっている。よく知られているのは、一七条の *propriété(s)* の単数複数問題であろう。本論文では、このようなテキストの細部における違いに注目しつつも、人権宣言の語彙について、むしろアンシャン・レジームの同時代の視点から読み解くと、どのように読めるのかということ、を、革命期に公民教育のために作られた「すごろく遊び」の図や当時発行された辞典などを用いて検討してみたい。

一例をあげれば、人権宣言三条に登場する *principe* ということばを「原理」⁽¹⁾ではなく「淵源」⁽²⁾と訳すべきことは通説となっているが、この語をアンシャン・レジーム期の辞典等で調べると、それが神学的な意味さえもちうることを、人権宣言の前文に出てくる「最高存在」とは「神」を意味することがつとに知られており、ちなみに明治初期のわが国で最初にフランス人権宣言が紹介されたときの訳では「天神」になっていたこと、人権 (*droits de l'homme*) と *souveraineté* とはの実質上の初出はルソーの『社会契約論』にあるのだが、それは同書末尾の「市民宗教」を論じた章に登場すること、これらのことは従来のフランス人権宣言研究では十分に注意が向けられてこなかった。

たのではないかと思われる。ことばへの注目をさらに図像資料で補ってみることによって、当時の人びとが一つひとつのことばにどのような思いをこめていたのかが具体的にイメージできるのではないだろうか。このように、従来の人権宣言の読解とは異なる読みを、ことばと図像に焦点をあてて、当時の時代のコンテキストのなかでとらえることを試み、筆者なりの人権宣言の訳も提案することにしてみたい。

一 フランス革命初期の人権宣言ポスターの分析

いわゆる一七八九年フランス人権宣言ポスターの原画は、現在、パリのカルナヴァレ博物館のフランス革命史セクションの部屋に展示されている。この絵は木の板に描かれており、その図はいろいろなところで見かけることができる。⁽⁴⁾ 原画の作者であるル・バルビエ（Jean-Jacques François Le Barbier, 1738-1826）は革命前に美術アカデミー会員だった人物で、一七九〇年八月三十一日にナンシーの兵営で起こった事件を題材にした絵の制作依頼を議会から受けたりにしている。ル・バルビエによるこの人権宣言の原画は当時、版画としても作成されていた。

それが図1である。版画の一番下の行には、この版画が当時、パリのパレ・ロワイヤル一四六番地ジョフレ（Jauffret）版画店およびフィリポー通り一五番地のランゲ版画店で売られていることがしるされているので、このポスターが普及していたことがうかがわれる。そもそも、原画でも版画でも、人権宣言の条文の下に大きめの字で「フランス人民の代表者たちに（AUX REPRÉSENTANTS DU PEUPLE FRANÇOIS）」の文言が示しているように、議会の議員たちに向けられたものであり、版画は議員たちに配られていたのである。⁽⁵⁾ なお、この綴り字については、

REPRÉSENTANTS の末尾の S の直前の T が落ちて
いること、FRANÇOIS の綴りも今日の FRANÇAIS
とは異なっているが、これは一九世紀になると、現
在の綴り字のように、複数形の末尾の t がのこるよ
うになり、また FRANÇOIS も FRANÇAIS となつて
いく。⁶⁾

ル・バルビエの人権宣言の絵がフランス革命の寓
意に満ちていることも、よく知られているところだ
ある。じつさい、図1の版画の下ところに「アレ
ゴリーの解説」が付されているので、一応「公式的
な」絵解きが可能となる。それによれば、絵の上方には二人の女性が描かれているが、鎖を引きちぎる左の女性
が「フランス」である。鎖はアンシャン・レژیムの専制を意味する。ただ、絵をよく見ると、王冠をかぶり、
マントにフランス王家のユリの紋章があることに注意しておこう。この時点ではまだ共和制ではないのである。
絵の上部右に位置する有翼の女性像はどうだろうか。公式解説文によれば、これは「法律」で、左手の指で人権
宣言のテキストを指し示している。そして、右手にもつ笏でもって「理性の最高の眼」を指し示し、立ちこめて
いた誤りだらけの暗雲を払ったところが描かれているのである。モーゼの十戒が二枚の板に書かれたことを思わ
せるかのように、人権宣言の条文も二枚に分けて書きしるされ、安定感のある柱と台座に収められている。図の
中央の檜の先端には自由を象徴する解放奴隷のかぶりものとされたフリジア帽があり、檜の持ち手の柄の部分は

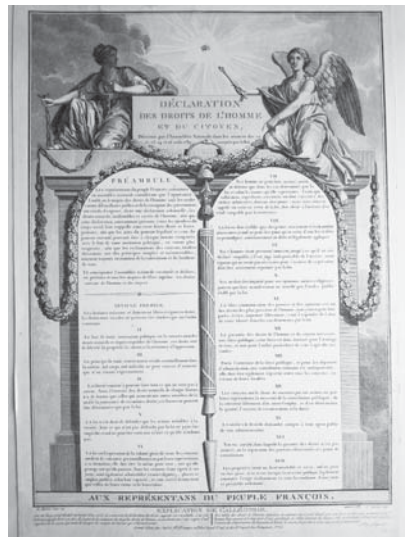


図1 革命初期のフランス人権宣言の版画
(カルナヴァレ博物館版画部所蔵、撮
影は筆者)

団結を意味する古代ローマの束桿（ウロボロス）の蛇が描かれていて、完全な無限を象徴するものとなっている。原画の絵では緑の柏の葉の輪飾りが長く両端にのびている。公式解説文では、以上の図柄が、王国の諸県の団結、自由、公民精神、政府の用心深さと賢明さを示すとされている。

じつは、先に述べたように、この図にしろられている条文テキストは、一七八九年時点のものを元にしており、人権宣言がその二年後のフランス最初の成文憲法、一七九一年憲法の冒頭に置かれた際のものとは細部においてではあるが異なっている。この一七九一年時点の微修正を経た人権宣言のポスターが図2である。二つの図の日付に注目してみよう。図1では「一七八九年八月二〇、二一、二三、二四、二六日の国民議会の会議で採択され、国王によって承諾された（acceptés）」

となっており、図2は「一七九一年九月三日の国民議会のデクレ」となっている。図1の日付では八月二二日が落ちているが、この日も議会での審議はなされている。これは描き手が書き落としたというより、おそらく当時の情報では正確に知ることができなかったのかもしれない。つまり、一般に一七八九年八月二六日が人権宣言採択の日付とされているが、その日の一日で前文と一七の条文がすべて確定したのではなく、一週間のプロセスを経ているということだ。すなわち、

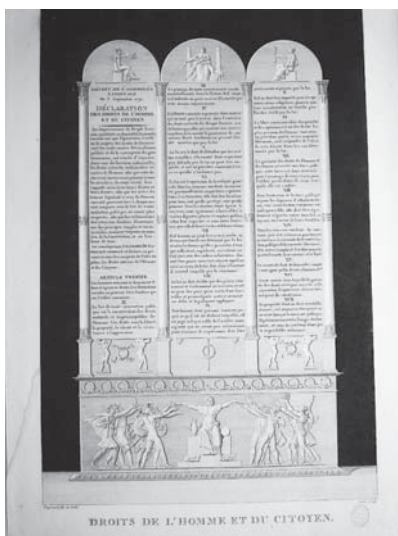


図2 一七九一年時点の人権宣言の版画
（カルナヴァレ博物館版画部所蔵）

表1 二つのポスターの条文の相違（○が今日、正文とされているもの）

	1789年のポスター	1791年のポスター
6条	autres distinction que celles	autre distinction que celle ○ ○
7条	les cas déterminés ○	le cas déterminé
10条	l'ordre public établi ○	l'ordre établi
12条	de ceux à qui	de ceux auxquels ○
13条	entre les citoyens	entre tous les citoyens ○
14条	Les citoyens ont le droit × ○	Tous les citoyens ont droit ○ ×
17条	Les propriétés	La propriété ○

の宣言」は「一七九一年の」とするのが厳密なところであるとの主張も出てくることになる。結局は、一七八九年から九一年の二年間でテキストに若干の「揺らぎ」が見られたということだ。

前文と三条までが八月二〇日に、四条から六条までが二日、七、八、九条が二二日、二三日は宗教的自由の論点で激論となり一〇条だけの採択、翌二四日は一条から三条まで、二五日が王家の重要行事である聖ルイ祭のために休みとなり、二六日に一四条から一六条、そして一七条の動議が出され、採択された。翌二七日は憲法の審議に入ることが決定されたので、八月二六日の時点で、議会はオフィシャルに人権宣言の審議終了を宣言しているわけではなく、翌日に議長が人権宣言の審議をつづけようとするものの、憲法の審議に移るべきだとの動議が通って、人権宣言の審議が前日で終了したというわけである。⁽⁸⁾

表1は、一七八九年のル・バルビエの原画と一七九一年の版画の条文の細部の違いをまとめたものである。よく知られているのは、一七条の propriétés の単数複数問題であるが、この問題については、すでに、わが国でも憲法学者たちによって詳細に紹介されていて、一言でいえば、一七九一年八月八日に、レドレールの動議で単数に修正されて、一七九一年憲法冒頭に置かれた人権宣言の条文が今日にいたっている。したがって、現在の第五共和国憲法前文にある「一七八九年⁽⁹⁾

二 人権宣言に用いられるテルミノロジー

人権宣言を翻訳する際には、また別の意味での揺らぎが見られる。それは、単語にこめられた意味内容にかんしてのことである。たとえば、第三条「およそ主権の *principe* は、本質的に国民のうちにある」に登場する *principe* という単語に注目してみよう。⁽¹¹⁾ 今、手元にあるいくつかの仏和辞典を引けば、その主たる語義は「原理、原則」であり、そのほか「根源」や「本源」(その用例として *principe de la vie* 生の源)の語義などもある。⁽¹²⁾ したがって、前述のように、岩波文庫『人権宣言集』の山本桂一訳が *principe* を「原理」と訳されているのは辞書にそくした素直な訳といえよう。ただ、今日では同じく岩波文庫の『新版 世界憲法集 第二版』高橋和之訳その他に見られるように、「根源」「淵源」と訳するのが通説である。フランス革命当時の *principe* という語の用法をすこし考えてみたい。

一六九四年に初版が出るアカデミー・フランセーズの辞書によれば、この初版でも一七九八年の第五版でも、最初の語義は「第一原因。この意味では、神だけにふさわしい語。例文として、神はすべて良きことの *principe* (はじまり)なり」とある。ちなみに、アカデミー・フランセーズの辞書初版のタイトルページの図柄の文字は「アルファとオメガ」すなわち「はじまりと終わり」と辞書にふさわしい銘になっているが、「アルファ」のラテン語のほうは、まさに「はじまり (*principium*)」となっている。⁽¹³⁾

このような用法、すなわち *principe* を本源と訳したほうが意味の通る例は、ルソーの『社会契約論』二編二章「主権は分割できない」や三編一章「政治体の死について」にも見られるところである。たとえば、後者では「政治体の生命の *principe* は、主権者の権威のうちにある (*Le principe de la vie politique est dans l'autorité*

souveraine)」とあって、原則と訳すより、源と訳すべきであろう。⁽¹⁴⁾

同様な用法として、フランス革命が恐怖政治に向かってゆく時期のロベスピエール人権宣言草案第四条後段が「自由は、ルールとしては正義を、限界としては他者の権利を、はじまり (principe) としては自然を、保護する手段としては法律をもつものである」としている。⁽¹⁵⁾

このような用例を踏まえて、本論文末尾に掲げた人権宣言の拙訳では三条の principe を「はじまり」と訳してみた。アンシャン・レジームの法格言に「あらゆる正義 (justice) は国王より発する」というものがあるが、これは人権宣言三条「主権は国民に発する」と対応させることができるのではないだろうか。このことをさらに、第六条冒頭部分「法律は一般の意思を表わす」を加味して考えると、アンシャン・レジーム期には「主権 (司法 justice 中心であるが) ↑ 国王 ↑ 神」が、革命期には「主権 (立法中心であるが) ↑ 国民 ↑ 最高存在」に転換しているとの図式を作ることでもきよう。⁽¹⁶⁾

なお、主権 (souveraineté) に注目して、革命後の主権の所在をめぐる憲法規定を確認しておけば以下のようになる。一七九一年憲法では「主権は国民 (nation) に属す」とし、一七九三年人権宣言では「主権は人民 (peuple) のうちにある」(二五条)とし、一七九五年権利義務宣言では「主権は本質的に市民全体 (universalité des citoyens) のうちにある」(一七条)となる。第二共和制の一八四八年憲法では「主権はフランス市民全体 (universalité des citoyens français) のうちにある」(一七条)と規定される。第三共和制の憲法法律での主権の規定はなく、第四共和制の一九四六年憲法は「国民の主権はフランス人民に属す」(三条)、現在の一九五八年の第五共和制憲法は「国民の主権は人民に属し」とし、主権の行使は代表者たち、および国民投票の方法によるとしている (二三条)。

Principe という語の場合には、ラテン語にもさかのぼれるような、その語源に近い意味が出ていたと思われるが、フランス革命期ならではの、ことばの変容も人権宣言のテクストに見てとれる。周知のように、宣言の前文末尾で「神 (Dieu)」と(いう)とばは使われず、'Être suprême' 拙訳では「存在のなかでも最高の存在」としたことはがそうだし、同じように、一三条、一四条では税 (impôt) という語が革命期には嫌われ、「分担貢献」という意味の *contribution* が使われている。つまり、前者は上からの課税を意味するから、それを下からの同意を伴ったの分担金に、まさに革命的な意味転換がこめられていたといえよう。⁽¹⁷⁾

そもそも、「人権 (droits de l'homme)」のターム自体、アメリカの著名なフランス革命史研究者リン・ハントによれば、その登場は一七六〇年代以降、具体的には一七六二年『社会契約論』四編八章の一節、「市民の宗教は「人の宗教と異なり」、人の義務と権利とを、その祭壇の範囲を超えて広げはしない (elle [religion du citoyen] n'étend les devoirs et les droits de l'homme qu'aussi loin que ses autels)」にあるとしている。⁽¹⁸⁾ ただし、この箇所ではルソーが焦点をあてているのは、通常考えられている人権のことではない。つまり、ルソーはここで、社会を人一般からなる一般社会と市民からなる個別社会とに区分し、それに応じて、宗教も人一般の宗教と、ある市民の宗教とに区分して、「人の義務と権利」(義務があること、しかも権利に先行していることに注意)を検討しているので、ここは人一般と市民との対比に重点があり、権利の問題が深められているのではない。⁽¹⁹⁾

したがって、ハントも指摘していることだが、一七四七年のビュルラマキ『自然法原理』一部七章四節の表題「人権の一般的基础 (Fondement général des Droits de l'homme)」のほうで、ルソーより先に「人の諸権利」のタームを使っていたとしていいのではないだろうか。この節の内容は、われわれの力や自由の行使が認められる根拠についての議論で、われわれの権能の使用は、それが人としての完成、幸福に向かうものであれば、理性によつ

て認められるとするものである。⁽²¹⁾

なお、フランス啓蒙思想の影響を受けたイタリアのベッカリア『犯罪と刑罰』（一七六四年初版）にも「もし人びとの権利（*diritti degli uomini*）と不屈の真理をまもるにあたつて、暴政やそれと同じくらいに致命的な無知の被害をこうむっている人びとを死の不安や苦しみから救う助けができるなら、……わたしも心のなぐさめを得ることができよう」とのフレーズがあり、これもハントの指摘していることだが、原書では一章「公共の秩序について」の末尾にあつたのが一七六五年末に出ているモルレのフランス語訳では序章の末尾に移されて、ベッカリア『犯罪と刑罰』における人権擁護の中心的位置づけが鮮明になっていることの証左とされている。⁽²²⁾

三 革命期の公民教育用すごろく遊びの絵解き

このような革命下でのことばの意味を理解するうえで興味深い資料がある。図3がそれである。以下、この読解を試みてみたい。

このすごろく遊びでは、スタートが「平等」からはじまる。ゴールは八三番目となるが、これは革命初期の地方制度改革で置かれた県の数になつたもので、八三県をまわつてあがりなのだが、そのゴールは「憲法」になっている。フランス革命の当初の目的がまさに憲法制定にあつたことを示している。

八三の輪には「めんどり」が七つあるので、それを引くと七六の事項となる。これを一覧表にしたのが表2である。



図3 革命初期のすごろく遊び（フランス国立図書館版画部所蔵）

表2 革命初期すごろく遊びの一覧表

	フランス語	日本語訳
1	L'ÉGALITÉ	平等
2	L'USURPATION	篡奪
3	L'ESCLAVAGE	隷属状態
4	L'IGNORANCE	無知
* 5	LA SÉDUCTION	誘惑 (× 8枚を支払う)
6	LES GUERRES CIVILES	内戦
7	L'ANARCHIE	無秩序
8	LA CRUAUTÉ	過酷さ
* 9	HENRI IV	アンリ4世 (○10枚もらえる)
10	LA BONTÉ	善良さ
11		めんどり
12		めんどり
13	LA SOCIÉTÉ	社会
14	LA LOI	法律
15	LE BIEN PUBLIC	公益
16		めんどり
17	LA TRAHISON	裏切り
* 18	LE DESPOTISME	専制 (×休止)
19	LES PETITES MAISONS	精神病院
20	L'ESPRIT DES CONQUÊTES	征服の精神
* 21	LA DETTE NATIONALE	国債 (×支払い枚数任意)
22	LA MISÈRE	貧窮
23	LE TIERS ÉTAT	第三身分
24	LES IMPOTS	諸税
* 25	LE CLERGÉ	聖職者 (○→55)
* 26	LA NOBLESSE	貴族 (×→1)
* 27	L'INTRIGUE	陰謀 (×休止)
* 28	LES MINISTRES	大臣たち (○→60)
29		めんどり
* 30	LETTRE DE CACHET	封印令状 (×休止)
* 31	LA BASTILLE	バスティーユ監獄 (×休止)
* 32	LES FERMIERS GÉNÉRAUX	徴税請負人 (×休止)
33	LA BANQUEROUTE	破産
* 34	MONTESQUIEU	モンテスキュー (○→49&56→75)
* 35	LE COURAGE	勇気 (○→51)
36		めんどり
37	LA PHILOSOPHIE	哲学・啓蒙思想
* 38	VOLTAIRE	ヴォルテール (○→75)
39	LA TOLÉRANCE	寛容
40	J. J. ROUSSEAU	ジャン＝ジャック・ルソー
41	LES DROITS DE L'HOMME	人権
42	LA COCARDE NATIONALE	国民の記章

	フランス語	日本語訳
43		めんどり
* 44	LA RÉVOLUTION	革命（○→79）
* 45	MIRABEAU	ミラボー（○→75）
* 46	L' ASSEMBLÉE NATIONALE	国民議会（○→73）
* 47	LE DON PATRIOTIQUE	愛国献金（○額任意→53）
* 48	LA RELIGION	宗教（○→76）
49	LE POUVOIR LÉGISLATIF	立法権
* 50	LA FRANCE	フランス（○→59）
51	LA GLOIRE	栄光
52	LA FÉDÉRATION	連盟〔祭〕
53	L' AUTEL DE LA PATRIE	祖国の祭壇
* 54	LE 14 JUILLET 1789	89年7月14日（○12枚→74）
55	L' AUTEL DE L' HYMEN	結合の祭壇
56	LE POUVOIR JUDICIAIRE	司法権
* 57	LES PRINCES	大公（×10枚）
58	LA DISSIMULATION	欺瞞
59	LA VIGILANCE	警戒
60	LA RESPONSABILITÉ	責任
* 61	LOUIS XVI	ルイ16世（○→65）
* 62	LE DAUPHIN	お世継ぎ（○→78）
* 63	VARENNES	ヴァレンヌ（×17）
64	L' AMOUR DE LA PARTIE	祖国愛
65	L' ACCEPTATION	〔人権宣言等の〕承諾
* 66	LES CONTRE RÉVOLUTIONNAIRES	反革命派（×→19）
* 67	LES ARISTOCRATES	アリストクラート（×→41）
* 68	LES MOINES	修道士（×→6）
* 69	LA DISCORDE	不和（×→7）
* 70	L' INCONSTANCE	不安定（×→3）
71		めんどり
* 72	LES CITOYENNES FRANÇAISES	フランス女性市民（○6枚）
73	LA CONCORDE	和合
74	LA LIBERTÉ	自由
75	LA COURONNE CIVILE	市民の栄冠
76	L' AMOUR DU PROCHAIN	隣人愛
77	LA FORCE ARMÉE	軍事力
78	LE PRINCE ROYAL	王太子
79	LA RÉGÉNÉRATION	再生
80	LE PARADIS	樂園
81	APOTHÉOSE DES GRANDS HOMMES	偉人の神格化
82	NOUVELLE ÉDUCATION	新しい教育
83	CONSTITUTION	憲法

七六の項目には徳、悪徳、人名、制度などが出てくる。ゴールまでの道のりは、山あり谷ありではあるが、一定のリズム、流れがあるように思われる。まず、右下の出発点の図柄は、女性（フランス）が時の翁によって鎖から解き放たれている図で、スタートの一番にあてられている項目は、聖職者、貴族、平民の三身分の「平等」である。これは人権宣言の第一条を想起させる。つまり、人は生まれながらに自由で権利において平等でありながらも、アンシャン・レジームの社会はそうはなっていないということである。

じつさい、つづく二から八までは困難の歩みを表わす項目がつづく。この混乱状態をいったん収めてくれるのが、九の名君「アンリ四世」である。一六世紀の宗教戦争の内乱を終結に導いた点でもアンリ大王とも呼ばれるが、なんといつても、このすぐろく遊びの図面の上の左右と下左に描かれているように、民衆に愛され慕われ気前の良い王として登場している。一三から一五の社会、法律、公益を経て、一七の「裏切り」から二二の「貧窮」までが苦難の道のりになる。二三から二八までは局面が変わり、全国三部会の三身分のうち聖職者はプラス、貴族はマイナスの評価になっている。あとでも述べるように、このすぐろく遊びでは宗教関係の項目にはプラスの価値が付与されているのは、一般に革命期の非キリスト教化運動と説明される現象が、おそらく、まだ見られない点で興味深い。三〇から三二までは革命期につよく非難されていたものといえ、三三も図をよく見れば、「詐欺破産」の晒刑が科されている場面となっている。この流れを断ち切るかのように、三四からはモンテスキュー、ヴォルテール、ルソーといった啓蒙思想家が登場し、四一の「人権」から本格的に革命の時代に入っていく五六までつづく。しかし、五七で流れは変わる。とくにヴァレンヌへの逃亡事件の尾を引くルイ一六世の評価は微妙なところである。六六から七〇まではゴール前の最後の試練ともいべき項目になる。だが、最後に七二からはさまざまな困難試練を経ての高みに登りつめたことがうかがえる。

以上の大まかな流れを踏まえたうえで、さらにこまかく、いくつかの事項の数字に付されているアステリスクの指示内容を見ていくことにしよう。一覧表では、たとえば五番目の「誘惑」のように八枚のコイン支払いを命じられるような場合もあれば、二五番「聖職者」だと五五番にワープできる場合もある。表中の「×」はペナルティ、「○」はボーナスに相当すると判断してつけたものである。（ただ、この判定は項目の意味するところにもよることがある。たとえば、二一番と四七番の指示内容について、コイン支払いは任意で同じだが、一応、○×は違いをつけている）

「×」と判定した項目をまず見てみよう。その項目は、「誘惑」「専制」「国債」と来て、「貴族」はスタート地点の「平等」にもどるように指示される。つまり革命が目指した封建的身分制の廃止が端的に表わされている。「陰謀」のつぎの「封印令状」「バステイーユ監獄」「徴税請負人」の三項目もアンシャン・レジームの悪弊を象徴するものである。五七の「大公」は一〇枚のコイン抛出が命じられ、一七九一年六月に起こった「ヴァレンヌ」事件は、公式には国王一家の誘拐事件とされてはいたものの、一七番の「裏切り」にもどるペナルティが課されている。国王一家の国外逃亡の失敗がフランス国民に落とした影を払拭することの困難さを示しているよう。六六番からつづく「×」もなかなか意味深長である。とくに六七「アリストクラート」が四一「人権宣言」にもどるよう指示されている点は、人権宣言の核心がどこにあるかを逆に照射している。この点、次節の一七九八年アカデミー・フランセーズの辞典の補遺で確認することになろう。

つぎに「○」印と判定したアステリスクを見ていく。まず人名の五名だが、アンリ四世とルイ一六世が国王として出てくる。これに六二の「お世継ぎ（ドーファン）」を並べることもできるかもしれない。ただ、「ルイ一六世」の指示は六五の「承諾（せよ）」なのであつて、一七八九年一〇月五日から六日のパリ民衆のヴェルサイユ行進

でようやく人権宣言の承諾がなされたことを踏まえたものになっていることに注意すべきで、アンリ四世や「お世継ぎ」のプラス評価とは異なるといえよう。モンテスキュー、ヴォルテール、ミラボーについては順当にいずれも七五「市民の栄冠」に指示が向けられている。ミラボーとヴォルテールの両名は一七九一年にパンテオン入りを果たしている。ルソーにアステリスクがないが、どのように考えたらいだろうか。推測の域は出ないが、まずアステリスクを付け忘れた可能性、ルソーのパンテオン入りは一七九四年であること、ジュネーヴ市民であること、社会契約論の著者としてより教育論の『エミール』などの側面が重視されていたのかもしれない。

人名のなかでモンテスキューは四九「立法権」と五六「司法権」を経由して七五に行くよう指示されていることも興味深い。人名に近いものとして二八番の「大臣たち」を見ると六〇「責任」が指示されている。「お世継ぎ」はゴールに近い七八に行くことが指示されている。また、二五の「聖職者」はつぎの番号の「貴族」と違って、五五の「結合の祭壇」に飛ぶことができ、四六の「国民議会」は七三の「和合」に飛べる。七二の「フランス女性市民」がコイン六枚もらえる。

四四の「革命」は七九の「再生」に飛ぶことができる。五〇の「フランス」は五九の「警戒」を怠らないように指示されているように読める。五四「一七八九年七月一日」はもちろんフランス革命の発端であるバステイーユ襲撃の日で今日、夏のヴァカンスを告げる祝日ともなっているが、その指し示すのが七四の「自由」として刻印されるわけだ。このほか、四七の「愛国献金」は五三「祖国の祭壇」へ、四八「宗教」は七六の「隣人愛」に飛べる。

全体に、このすころく遊びの教育効果はよくできたものになっているといえよう。人権宣言に引き付けて考えてみると、平等からはじまって憲法をゴールにしているが、ちょうど折り返し地点に四一「人権宣言」があるわ

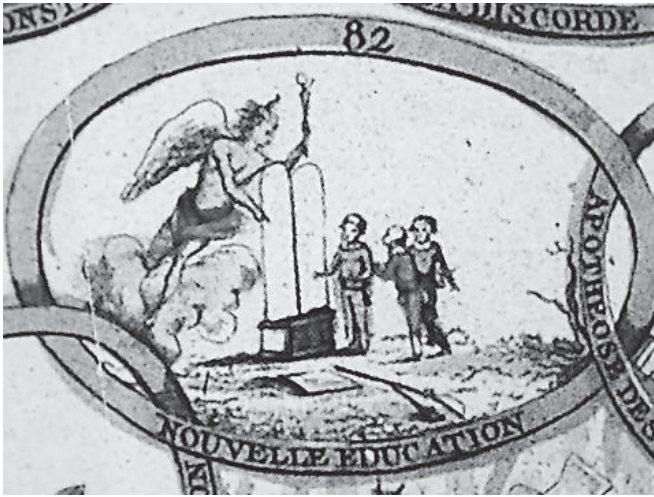


図4 「新しい教育」（図柄の石版を指し示す人物など、図1との共通点にも注意）

けで、この人権宣言を指針にして「憲法」が作り上げられていくことが、この位置にこめられている意味なのかもしれない。また、ゴールの「憲法」の直前にあるのが八二番「新しい教育」であることは、革命の目的の再生とも関連して教育が重要視されていたことをうかがわせる。その図4を見ると、有翼の自由の神のかざすたいまつ（光）で子どもたちが、おそらく憲法の刻まれた石版（前に読み上げているか）のようにある。この教育の重視は、また最後にもどることにするが、フランス革命期のキーワードが「再生」にあったことと直結しており、人間の再生が国家の再生に連動して考えられているのである。

四 フランス革命期の辞典類に見られる新たな語義

ここで、このすころく遊びをより深く読み解くために、フランス革命期に出版された辞典や事典を使い、人権宣言の用語に焦点をあててかたちで検討してみよう。⁽²³⁾

革命期に出版された辞典類のなかで、まず一般的なフランス語辞書として代表的なものは、やはり一七九八年のアカデミー・フランセーズの辞典第五版である。とくに、その補遺はフランス革命勃発から出版年の一七九八年までのおよそ十年間に登場した新語造語および革命期に新たな意味の付け加わった単語を集めていて、最初の手掛かりを提供してくれる。前者のネオロジスムとしては、たとえば、革命期に採用されたメートル法関係の語彙や「ギロチン」などもあるが、革命期の制度の用語も当然登場する。もちろん、従来の語に新たな意味の付け加わった後者の例としては、たとえば、革命以降の「県」の意味での *département* があり、このような場合には単語の前にアステリスクが付され、本編でも同じ単語の項目があることを示すようになっていて、つまり、革命期間中のまったくの新語かどうかかわかるようになっていて、ちなみに、この補遺は、一九八七年に、イザベル・アルバレ「ひとつの大革命と四一八の単語」という序文を付して小さな書物にまとめられている。⁽²⁴⁾

このアカデミー・フランセーズの辞書の補遺では、上述のすころく遊びの出発点だった「平等 (ÉGALITÉ)」がアステリスク付きで、すなわち革命期に新たな意味が付け加わった項目としてあげられている。その用例として「権利の平等」とあり、説明には「法律は、保護するにしろ、処罰するにしろ、万人に同じ」という人権宣言六条が引かれている。「自由 (LIBERTÉ)」も法律用語の意味が追加され、「他人の権利を害さないことをなすいう権能、そして一般意思から、あるいは代表者たちから発する法律に同意し、その法律によって統治されること」

とある。「法律 (LOI)」の項目で追加されている内容は一七九三年憲法と一七九五年憲法にかかわる技術的な定義となっており、さしあたり、直接、特記する内容はない。「主権 (SOVERAINETÉ)」については、「最高権威 (suprématie)。法律を作り、執行を保証する権力。この力はひとつで、不可分で、譲り渡すことができず、時効にかかることはない。それは全体として人民に属するもので、人民は自ら、あるいは代表者たちを通じて主権を行使する」としるされることになる。「国民 (NATION)」の項目は補遺にはないものの、「国民にたいする大逆罪 (CRIME DE LÈZE (sic)-NATION)」の項目が立てられ、一七九一年憲法下では国民高等法院で裁かれなくてはならないと説明されている。「憲法」そのものは補遺の項目になっていないものの、その形容詞形や合憲性などの新語が収録されている。新語の「憲法典 (ACTE CONSTITUTIONNEL)」の説明には「フランス憲法にあたえられたタイトル」とあるし、「憲章 (CHARTRE CONSTITUTIONNELLE)」には「人民が自ら定めた憲法のタイトルで、それにもとづいて治められる」とある。「人権」の項目はここにはないが、すぐろくゲームで人権にもどるよう指示される「アリストクラート (ARISTOCRATE)」は意味変容の単語として以下のように説明されている。「アリストクラート」は「フランス革命以降、アンシャン・レジームの支持者にあたえられる名称」で、「アリストクラシー」は「かつての貴族や特権身分のカーストで、新政府の敵」とある。このアリストクラシーの対義語、アントニムとして登場しているのが、「デモクラシー (DÉMOCRATIE)」である。そこには、「今日では、大革命を支持する意見、民衆の大義の主張の意味で用いられる」とある。すぐろくゲームでは精神病院行きが指示されていた反革命派（革命の敵と解説されている）の「反革命 (CONTRE-RÉVOLUTION)」も興味深いものがあり、révolutionに「公転」の意味もあることから、「最初の革命とは反対方向にもう一度革命すること」「以前の状態に事態をもどすこと」とある。

この一般的なアカデミー・フランセーズの国語辞典のほか、革命初期に『憲法事典』⁽²⁵⁾が出版されていて、すぐろく遊びの図の読解にも参考になる。出版年は「フランス自由の第三年」とあるので、一七九一年、つまりフランス最初の成文憲法である一七九一年憲法の年にあたると考えられる。

著者は、タイトルページのあとの序言で「本書がささげられるのは、必ずしも知識ある人びとではなく、そのような人たちの知識は本書よりも上にあり、わたしが企てたのは、わたし自身の教養を高めるためであり、またわたしと同様に新たな市民身分にあたえられる権利と課される義務とを学びたいと思っている人びとのために」出版すると、本事典の意図するところを述べている。⁽²⁶⁾つまり、憲法はできあがったが、立法府はまだ公教育にについての重要な仕事をおえていない、というのである。

以下、この事典ですごくろく遊びの図の事項と重なる項目を見ていくことにしたいが、まずアカデミー・フランセーズの辞書の補遺で検討した項目が『憲法事典』でどのように解説されているのかを紹介しよう。⁽²⁷⁾

「平等」の項では人権宣言一条も引用されており、自然が二人の人間のあいだに質や力において優劣の違いを設けたにしても、権利はまったく同じものをあたえているのであり、この権利の平等こそ、自由の基礎になっている、いかなる社会制度によっても変えられるべきではないとしている（p. 179）。権利の平等は必然的に義務の平等を想起させ、義務もすべての市民に区別なく課されるものとなる。特権の名で義務を一部の人に免除するのは自然の平等に反することになるのである。自然が人間同様、政府の活動の導き手でなければならぬ。人権宣言が同条で「社会的区別は共通の……」とするのは自然の平等を破壊するものではなく、それは法律によって、法律に服しているだけだからとする（pp. 180-181）。

「自由」については、この項目の冒頭に定義が置かれる。すなわち「自然が各人にあたえる権利で、人は他人

を害しなければ、自分の幸福にもっともふさわしいと判断するやり方で、自分自身と自分の財産を使用できること」とあり、この権利は自然法にしか限界をもたず、「汝がされたくないことを他人にするなかれ」との教えをまもっていれば正しいから自由といえる。つまり、不正がはじまるところで自由は終わるのである。この自由は自然状態での人の自由で、人は社会状態に入ってもこの自由を享受する権利をもつ。自然の自由と市民の自由 (*liberte civile*) を区別する考えは間違いであり、自然の自由が社会秩序においては法律によって制限されるべきだとの考えとは遠く、法律は自然の自由を全面的に保護しなければならぬのだ。そしてプーブルが自由であるために自分自身が立法者でなくてはならず、そして法律が人民によって裁可されなくてはならないという (*pp. 305-307*)。

「法律」では、冒頭に「ラテン語の *lex* から来た語」という語源の説明からスタートし、「法律とは拘束 (*lien*) するもの (*quod ligat*)、義務付ける (*obliger*) ものということであり、このような性格が、法律に服する人びとにたいして見られることになる」という。法律は主権的意思の表明であらねばならず、主権の意思は国民一般の願望ということである。人民の大多数の願ひは常に法律であり、たとえこの法律が常に正しいとは限らなくともそうである。というのも、人民は常に十分な知識があるとは限らないからである。……法律が正しいものであるためには、それに服す人びとの自然権を害さないことが必要である。したがって、人びとが権利の範囲全体をよく知っておくべきである。だから、国民議會は人権宣言を先に作成したのである。……法律は自然の自由に限界を課すどころではなく、逆に、各市民にその範囲での自由を全面的に保障するものなのである。人は権利を制限するためにではなく、権利を保持する (*conserver*) ために法律を作ったのである。人口が多いフランスのような国では、人民の代表者を選んで立法院の制度を形成することになる。だからといって、代表者が主権者なので

はない。彼らの意思が法律となりうるのは人民の意思と合致している場合だけである。だから、代表者たちの起草するデクレは主権者に提示される提案といふべきものであり、それが法律となるのは主権者の同意裁可があった時だけである。キケロがいうように（*Orat. pro Corn. Balbo*）、人民の裁可を受けたものほど不可侵なものはないのである（*Sacro-sanctum nihil esse potest, nisi quod per populum sanctum est.*）。……そして、法律が成立しても、その法律に問題点が見られる場合には、不服従をすすめるのではなく、問題点を同朋市民に指摘し、立法院に当該法律の修正削除を求める自由がある。……こうして、国民は法律を変更する権利があるということになる。さらには、国民が適当と判断すれば、憲法ないし政府の形態を修正ないし全面変更することもできるのである。しかし、その変更がおこなわれるときまでは、各市民は、既存の法律に従う義務がある。……重大な変更、たとえば憲法的法律の変更は、人民の大多数の願いにもとづかなければならない。……憲法的法律とそれ以外の法律との違いは政治的法律（*loix politiques*）と市民的法律（*loix civiles*）の違いということになる。前者は政府の基礎になるものである。後者はその規則たるものである。前者は自然にもとづき不変であるのにたいし、後者は状況によって変化するものである。後者は時間、場所、風土によって変化し、前者のほうは人の自然権に基礎を置いているものなので、地球のどこでも同じであるべきなのだとする（pp. 312-316）。

すごろく遊びの図の最後の「憲法」はどのように説明されているだろうか。さすがに、この事典では、法的な説明から入り、冒頭で「基本法の集まりで、ひとつの国民（*peuple*）の政体を構成するもの」との記述がなされ、語源の説明がつづく。すなわち、「この語は、ラテン語の *constituere*（*cum-statuere*）から由来し、樹立する（*établir*）、規制する（*regler*）、命令する（*ordonner*）等の意味から来るものである」としるされる。この単語は、一般的には、全体を構成するさまざまな部分の配置をいう。しかも、より調和がとれた意味での配置ということである。

国の「憲法」は、その政府の部分部分の組織ということである。憲法を樹立する権利が属するのは人民（peuple）にのみである。したがって、彼ら自らが作ったのではない憲法は悪しき憲法ということになる。ブリュートゥスがいのように「人民は自分の法律をもち、それはその自然（本性）から受け取っており、意のままに変更もできるのである」が、この変更を判断できるのは国民だけなのであり、立法府が人民から明示的な命令なしに変更しようとするれば、それは「国民への大逆罪（crime de lèse-nation）」を犯すことになる。良き憲法の目的性格はあらゆる市民に、区別なく、彼らの自然権の自由で完全な行使を保障することである。したがって、「憲法」たるもの、それは彼らの権利を完全に知悉している国民の一般的願いの表現（expression du vœu général d'une nation parfaitement instruite de ses droits）（イタリックの強調は石井）たるものでなければならぬ。したがって、人の自然権（les droits naturels d'homme）が法律によって軽視されているような国（état）は、憲法をもつものではないし、また、権力の分立が定められていないようなすべての政治社会についても同様である（権利宣言一六条）。この原理をフランスに適用して考えれば、今までフランスに憲法はなかったことになる。なぜなら、人びとが従ってきた法律は、彼らが自ら作ったものではなかったし、主権は王と貴族集団に分かちもたれていたし、あらゆる権力は混同されていたし、市民の権利はたえず侵害されてきたからである。一七八九年に召集された人民の代表者たちは、何よりも憲法をフランスにあたえる命令権限を国民から受け取ってきたのだ。今や、フランスには憲法があり、フランス人は世界でもっとも自由な国民となった。フランスでは、あらゆる権限は国民から由来するものでなければならなくなり、政体は君主制で、ここでは法律に優越する権威は存在しないのであり、王は法律によってしか君臨せず、王が服従を求めることができるのも法律によってのみなのである。王の人身は不可侵と宣言され、王位継承も男系で定められ、議会も常設の一院制でその権限も規定されている。王は執行権

の最高の長である。人民は代議士、行政官、聖職者、裁判官を選挙する。あらゆる市民は、その才能美德以外の区別なく、政府の公職に就くことができる。国民は自分の権利をまもるために武装する。カトリック信仰にかかわる費用は国庫から支出されるが、このことは他の信仰の礼拝を排除するものではない。信教 (consciences) はフランスでは自由なのである (以上 p. 103)。王国は八三の県に分けられ、さらにデイストリクト、カントンに区分されていく。各デイストリクトに民事裁判所が、各カントンに治安判事が、重罪裁判所は各県に置かれる。重罪事件では陪審制による。被告人は有罪の判決が出るまで無罪の推定がなされ、弁護人を選ぶことができる。裁判は無料でなされる。デイストリクトの民事裁判の上訴は隣接のデイストリクト裁判所になり、破棄裁判所がその上に置かれる。大臣の不正や国事犯については国家高等法院が裁判する。食料品の流通は王国全土において自由である。租税 (contribution) は財産に比例して、すべての市民に割り当てられる。義務の免除ないし特権によって市民が区別されることはない。権利の平等 (égalité des droits)、これなくしてもはや正義はなく、これがフランス憲法の基礎なのである。われわれの自由の構築物はこの上に築かれているのであり、権利の平等は自然によって基礎づけられているから、自然と同じくらいに不変なものであり、暴君といえども破壊することはできない (pp. 100-104)。

では、平等とは反対となる「アリストクラシー」の項目はどうであらうか。冒頭にこの語の定義として、「puissance des Grands (=Aristoi)」とあり、すなわち「権力が一握りの人びとによって行使され、ほかのすべての市民が排除されている政体」とある。そして歴史的説明がつづいたあと、フランスの政体は真実、アリストクラシーと考えられたが、一七八九年の幸いなる革命によってフランスにアリストクラシーの政体はもはやない。あらゆる市民は法律の前に平等であるのだから、大も小もないのだ。国民議會は一七九〇年六月一日に Prince,

Comte, Marquis の称号を廃止したというのである (pp. 27-28)。すなわち遊びの図の五七番が「大公 (Princes)」でベナルティが付されていたことを想起することができよう。

このアリストクラシーにたいする「デモクラシー」の解説はどうだろう。冒頭、「人民の団体が主権を行使している政体。この語は、ギリシア語起源で、『人民』を表わすデモスと『力、支配、権力、政体』を表わすクラトスからなる」が置かれる。フランスの新しい憲法は君主制の政体をうたってはいるが、本当のところ、民主制の政体といってよく、というのも、憲法冒頭の条項が「主権のあらゆる行為は、本質的に国民に由来し、また国民からのみ由来しうる」と規定しているからである。歴史的に、デモクラシーは人間が最初に知った政体であり、というのもそれは唯一自然な政体だからなのだが、もっともすぐれた政体といえる。いくつかの家族が同じ場所に集まり、土地を耕し、共同体のために等しい負担をするのが歴史のはじまりとすれば、一握り、ないしひとりの人に行政をゆだねるアリストクラシーやモナルシーは後発のものといえるだろう。したがって、デモクラシーの第一の、そして主要な特徴は平等が国の構成員全員に支配的であるということだ。というのも、法律は優遇するも処罰するも等しく市民を扱うものだからである。アリストクラシーやモナルシーでは法律は区別、位階、恩寵を設けているのであり、デモクラシーの基礎である自然の平等 (égalité naturelle) を侵害しているのである。また、人民の代表者については、デモクラシーの場合、選挙で選ばれることになり、アリストクラシー等のように代表者がずっと同じで罷免されないとということもなく (pp. 146-149)。

以上のほかにも、この『憲法事典』はすころく遊びの図の解説に参考になる。たとえば、六二番「お世継ぎ (dauphin)」と七八番「王太子 (prince royal)」の関係は、本書によれば、「お世継ぎ」はヴァロワ朝のころからの称号でアンシャン・レジームに結びつくものとして否定的であり、お世継ぎへの教育が重要なことを述べ、「王

太子」の項目解説にあるように、革命期の国民議會は、王位継承権を有する称号を、*dauphin* から *prince royal* としたのである (pp. 139-141, 481-482)。この説明は、なぜ六二番が七八番に飛ぶように指示されているかを明らかにしてくれる。

また、二八番「大臣」と六〇番「責任」の関係も、『憲法事典』の「責任」の解説とうまく符合する。すなわち、冒頭の語の定義のあと、以下のような記述となる。執行権の役人は、公選で選ばれた者であれ、国王によって任命された者であれ、その行政に責任がなければならぬし、責任がある。とくに、大臣などがそうであり、新しい法律はその責任を重いものになっている。国王の意思に従ったまでのこと、という大臣の弁明はもはや、かつてのようには、通用しない。国王は法律の欲することしか欲することはできない。そして、大臣は国王の命令が法律に反するばあいにはそれに従うことを拒否しなければならない。国王は不可侵であるので (*inviolabilité* の項目参照)、大臣たちが国王のあたえる命令すべてについて責任を負うのである。大臣の副署のない命令は執行されることはできないとされている (pp. 527-528)。

六一番「ルイ一六世」が六五番「承諾」に向けられている点も、本事典によって法律的な説明がつく。「承諾」の項では以下のように説明される。国民議會は法律を制定するために、国王も協力することが必要と考え、デクレ採択後は国王に提示され、*acceptation* または *sanction* を求めることが規定された。王の *acceptation* と王の *sanction* の違いは、前者は憲法上のデクレである場合で、後者はそうではない場合である（したがって、憲法的法律が通常法律なのかの違いにもなるので「法律」の項目を参照のこと）。一七九〇年一月二日、議會は憲法的デクレの場合、王の同意の文言は「王は承諾し執行させよう (*Le roi accepte et fera exécuter*)」になることを定めた (p. 7)。「憲法事典」には「裁可 (*Sanction*)」の項目もあり、「受諾」との相違が説明されている。冒頭は、

語の定義ではじまり、裁可とは「立法府のデクレにあたえられる確認（confirmation）であり、この確認によって当該デクレは法律となり、すべての市民に強制できる。この語はラテン語の *sanctio* から来ていて、強固なものにすること（*affermissement*）、確認を意味する」とあり、つぎに国王の拒否権の問題も絡めて一七九一年憲法の解説となる（p. 554）。多くの人が考え違いをしているが、憲法そのものを制定するに際して、立法府は国の憲法は国王の承諾（*acceptation*）とは独立しており、国王のサンクションを必要としないと宣言したのである。憲法は国王によってサンクションされていないし、人民によってもサンクションされてはいない。いかに人びとがその成立を祝ったにせよ、手続き上、憲法のサンクションの規定はないからである（p. 560）。しかし、憲法も人民のサンクションを仰ぐべきであろう。具体的には八三県の選挙会に提示され、過半数の賛成を求めるのである。このようにして、国民が自らの主権を行使するのである。革命に反対の者たちは、国王が自由に拒否権を行使できないというが、それは大きな間違いというものだ。そもそも国王に拒否権をゆだねたのが不幸のはじまりなのだ（p. 561）。

『憲法事典』の著者の考えは一七九一年憲法の理念よりも急進的といえる。それは当時の政治状況・国際情勢が背景にあるだろう。たとえば、すぐろく遊びの図の七番「無秩序」は、この事典では、フランス革命の敵対者たちは、たえず「フランス王国がアナルシーの状態にある」と喧伝するが、フランスは法律が侵害されているわけではなく、国王やその行政官も法律を執行させる権力を有し、市民も法律を維持するための武器を有している。アナルシーとは正反対で、敵対者たちの中傷はばかげたものであるとする（p. 22）。

図像学的に興味深いものとしては、三三番「破産」が『憲法事典』の解説では、通常の破産者の説明のあと、イタリア語で *banco-rotto* は「壊れたベンチ」という意味で、これは破産者を公共の広場でそのようなベンチに

座らせて晒したことによると、すごろく遊びの図の説明とマッチしている。一七八九年二月二日のデクレ第一節五条で破産者は能動市民の資格をはく奪されることを定めていることも付記されている (pp. 44-45)。

前節のすごろく遊びの説明で、二六番「聖職者」が肯定的な評価であることを指摘しておいたが、以下の『憲法事典』「聖職者」の解説が参考になる。まず語源的に「聖職者 (prêtres) はかつて *clercs* と呼ばれ、すなわち学識あるものという意味で、彼らだけが教養があるということで、教会団体員はクレルジェとの名称をもっていた」と説明され、かつては、名誉や特権を帯びていたわけだが、国民議会は聖職者の全面的な改革を断行し、教会財産も国有化 (一七八九年一月二日) することになった (pp. 75-76)。つまり、特権身分ではもはやないということだ。

四二番「国民の記章」のすごろく遊びの図は人びとが集まっているところが描かれているが、『憲法事典』の「記章」と照らし合わせると、肯定的な意味での蜂起 (insurrection)、つまり圧制への抵抗が含意されているというのは深読みが過ぎるだろうか。その説明はつぎの通りである。青、赤そして白「色の順番はママ」のリボンの結びで、フランス人の蜂起のしるしとなったもので、国王は連隊のすべての兵にこの着用を命じた。この三色は国民の色を示すものとなった。また海上の船籍を示す国旗ともなった。自由のエンブレムのこの三色旗が地上のすみずみまで行き渡ることだろう (p. 78)。「蜂起」の項目では、北アメリカの栄光ある革命以降、よく使われるようになり、支配する行政官が法律をおかし、権力を乱用するような場合において、人民が行政官にたいして立ち上ることを意味するようになったという。それは、ラテン語で「⁽³⁸⁾にたいして立ち上がる」を意味する *insurgere* から来ている。蜂起 (Insurrection) は暴動 (révolte) ではない。暴動というのは錯乱状態の民衆の、正当な法律にたいする反乱行為であり、前者の「蜂起」は憤りから来る当然の帰結であり、防衛の行為であり、ま

さに「圧制への抵抗」なのである（259-262）。

この蜂起に関連して、「五三番」連盟は『憲法事典』にも参考になる項目がある。すなわち、「連盟（Fédération）」（p. 202）は「連盟（Confédération）」を見よとあり、そこでは以下のような説明となっている。まず語源はラテン語で「いっしょに」の *cum* と「同盟」の *foedus* の合わさったもので、人びとが集まって、自分たちの利益・権利・生命をたがいにまもることを約束するというものである。この語は、共通の敵に抵抗するために力を結集する同盟も意味する。国の安全を害する同盟もありうるが、人民の権利をまもるための同盟はきわめて神聖なものであり、フランス国民は全世界にその例を示した最初の国民である。すなわち、一七九〇年七月一四日王国の全県の議員たちは、自由の擁護のために武器をとり、祖国の祭壇で、必要とあらば、祖国のために生死をかけると誓ったのである。この恐れるべき誓いを忘れてフランス人民を鉄鎖に繋ぎなおそうとするような暴君どもに災いあれ、と（92-93）。

この『憲法事典』は、すごろく遊びの図のやや楽観的すぎる革命理念の内実をも明らかにしてくれる。四七番「愛国献金」は任意の額を献金して五三番に飛ぶことのできるルールになっていたが、『憲法事典』の「貢献分担税（Contribution）」には、国民議會は、国民の同意していない、かつてのあらゆる税（*impôts*）を廃棄し、*impôts* の名称に代えて *contributions* としたことを述べ（p. 108）、「愛国貢献分担税について、これは当初は自発的なもので、危機にある国の財政に寄付することであったが、一七九〇年三月二七日、国民議會は、「能動市民で、四〇〇リールを超える純所得をもっているような場合には、第一次集會に出席する際に、愛国献金をしたことの証明書提示が求められる」と議決したとの解説がつづく。つまり、選挙権の行使には愛国税の支払いが必要ということになるのである（p. 115）。結局、*Impôt* と *Contribution* との違いは、*Impôt* の項目で解説されている。すなわち、人

民が自ら、「または」その代表者を通じて、国の必要を満たす額を定めるときは貢献分担金 *contribution* と呼ばれ、共同の、かつ自発的な寄金ということになり、これにたいし、絶対的な政府がこの額を思うままに決めるときには、それは税金 (*impôt*) と呼ばれ、負担 *charge* ということになる。この語は人民が同意しない負担であるから、奴隷制の第一の特徴ということになる (p. 250)。

すこしく遊びの図で二〇番「征服の精神」についてだが、『憲法事典』の「征服 (*Conquête*)」では、「武力によって、人のものを取る」と定義され、力づくでの権利などは不正であり、したがって、あらゆる征服は、それが武力によるものであるならば、篡奪ということになるとしていて、さらにフランス国民は、一七九〇年五月二二日、「征服をなすことを目的としたいかなる戦争をも企てることを放棄する」と宣言したと説明している (p. 93)。

『憲法事典』の事項には「革命 (*Révolution*)」もあるが、アカデミー・フランセーズの辞書のような天体の公転の意味等、語源にかかわる説明はなく、政治的な意味での、しかも称賛する意味での革命の事項説明となっている。すなわち、冒頭に「人民 (*peuple*) の政体の突然かつ暴力的な変更」とあり、この種の革命のうちでもっとも幸福なものが一七八九年のフランスで起こったものという文章がつづく。そして、この革命はもっとも完全無欠な政体を生み出したとする。この革命により、新たな時代がはじまり、キリスト紀元の一七八九年目の年は自由の君臨第一年目となる。モニュメント、銘句、メダイユ、通貨がその記憶を永遠なものとし、憲法はフランス革命の思い出をとどめるための国民の祭典を開くことを約束している。これらの制度は人類への教訓になり、すべての抑圧された人民はそこに彼らの義務を読み取って、われらの模倣をおこなうであろう。以下、この光明が人類に広がるための努力をうたってこの項目は終わるのである (pp. 533-535)。

おわりに

すごろく遊びの図でもゴールの前に「新しい教育」が置かれていたが、『憲法事典』の「公教育（Instruction publique）」もこの時期の教育の位置の重要性を印象付けるものになっている。すなわち、冒頭「無知は奴隸制の母である」とのインパクトある文章ではじまり、もし人民が彼らの権利をけつして見誤ることがなかったならば、暴君たちが彼らの自由を縛り付けることもけつてなかったらう。だから、暴君どもは知識の光明が奴隸たちのところに届くのを阻止しようとする。人民がその最初の自由を取りもどしたとき、社会が暴君にたいして主権を回復したとき、新たな隷属が起きないように備えなければならないのだ。無知が隷属を引き起こす。教育は自由を保つのだ。法律が人民に彼らの権利を保障するだけでは足りないものであって、人民が権利を知り、政府が課す義務と彼らの自然権とを比べることができるようになければならないのだ。公教育は生まれたばかりの公共精神を育成する、とある（pp. 257-259）。

人権宣言は、そのような意味でも、テキストであり、モニュメントでもあったといえよう。そのことを示すような革命期の議会での議論がある。一七八九年人権宣言は、「はじめに」で述べたように、フランス最初の憲法である一七九一年九月の憲法冒頭に置かれるのだが、条文を最終確定する一七九一年八月八日の議会では、一七条の「所有」の単語が複数形から単数形に改められたことが知られている。ここで注目したいのは、その議論の前段で、字句修正すべきでないとの立場からのトゥーレ議員の発言である。これはおよそ二年前にできた人権宣言が、当時の人びとにどのように位置づけられたかを示すものになっている。彼はつぎのようにいう。「それ（人権宣言）は宗教的で神聖な性格を獲得した。それは政治信条のシンボルとなった。それは公共の場に印刷されて

田舎の市民の家にまで掲示されて、子どもたちはそこで読むことを学ぶ」と。人権宣言の公民教育上の価値は、内容は共和制の体制に合わせて一新されることにはなるが、一七九三年憲法最後の条文が「権利宣言および憲法典は立法府の議会内および公共広場の掲示板に刻まれる」(一二四条)とのことばによく示されている。⁽³⁰⁾ 人権宣言が革命祭典等で読み上げられてもいた。このことは、キリスト教に代わる新たな教理問答のテキストになっていくということでもある。

さらに映画ということにはなるが、「地下水道」や「灰とダイヤモンド」で知られるアンジェイ・ワイダ監督の一九八二年作品「ダントシ」の最初のほうで、ロベスピエールがバリで下宿している家の男の子が人権宣言をたどたどしく暗記させられている場面が出てきて、映画の最後では、この同じ少年が見事に人権宣言を暗唱させてエンドロールと重なって終わりになることが想起される。しかも、深読みが過ぎるのかもしれないが、冒頭部分の少年は入浴のバスタブで、つまり自然の姿で暗記しているのが、最後には少国民のような正装をして朗々と人権宣言を暗唱してみせるのである。

周知のように、一七八九年人権宣言の正式名称には、「人」と「市民」が含まれている。人の権利は生まれながらに有する自然権として、市民の権利は社会のなかでの公民権である。この二つの権利は、一七八九年人権宣言の一七の条文において、前者の人権が主として前半の条文に出てくるのに対して、市民のチームは第六条以降にならないと登場しない。一般的な感覚では、人の権利と市民の権利の集合図は、人権が大きな円で、市民権がそのなかに含まれる小円のベン図になるだろう。一瞬、市民権のほうが限定されているようなイメージとなるが、当然、市民は人権ももつのだから、人権と市民権を二分して別物と考えるべきではない。たとえば、一条「思想や意見の自由なコミュニケーションは、人の権利のなかでもっとも貴重なもののひとつである。ゆえに、市民

はすべて、自由に話し、自由に書き、自由に印刷することができる」や一二条「人の、および市民の権利を保障するために……」は、文章としても「人」と「市民」が別物ととらえられているのではなく、あたかもたたみかけるように「人の、および市民の」となっている。

結論的には、人権宣言の一七の条文（厳密には一六条まで）には一連の流れがあるということだ。それはダンTONの映画で男の子が「立派な」少国民へと成長していく物語に重ね合わせることができる。ロベスピエールが一七九三年七月二九日、国民公会でルペルティエ法案にканして「五歳で祖国は子どもたちを自然から受け取り、一二歳で社会にもどす」と演説したのを思わせるかのように、教育することによって、「人の権利」と「市民の権利」の関係は、自然権としての人の権利は生まれながらにしてもつものではありながら、それは「もちつづける」のであるから、社会形成後はさらに強められると考えることができ、そうすると、集合のベン図で考えた場合、一般的な考えとは逆に、市民の権利が人の権利も重ね取るような、時間軸を入れて、立体的な図を思い描くことができるのではないだろうか。

本論文の資料として末尾に掲載した一七八九年人権宣言の拙訳は、このようなテキスト全体の流れを重視するかたちで訳してみたものである。また、なるべく若い人にもわかってもらえるような訳を心がけ、と同時に、当時の語義・語感がすこしでも伝わるようにしてみたものである。

われわれはことばによって、世界をとらえようとするわけで、世界を変えるためにはことばを変革せざるをえないこともあるわけだ。人権宣言のテキストは、革命期の人びとの考えていた、あるべき世界への思いというものを感じ取ることができるモニュメントになっているのである。

【付記】

本稿は二〇一三年六月一五日法政大学で開催された法制史学会第六五回総会での報告に加筆修正等したものである。一七八九年人権宣言のモニュメントとしてのその後の歴史についての部分は本稿では間に合わなかったことをお詫びしたい。なお、学会報告をおすすめいただいた川口由彦先生、司会の労をお取りくださった岩谷十郎先生、ならびにご質問ご意見を賜ったご出席の先生方にお礼申し上げます。

注

- (1) 『人権宣言集』岩波文庫、一九五七年初版、一三二頁。
- (2) 『新版 世界憲法集 第二版』岩波文庫、二〇一二年、三三八頁。
- (3) Philippe de Carbonnière, *La Révolution : Musée Carnavalet*, Paris 2009, p. 14.
- (4) フランス革命二〇周年の一九八九年には記念切手の図柄にもなっている。ちなみに、この記念切手では、前文の *devoirs* とすべきところだが *pouvoirs* の誤植になっている。なお、この誤植は図1の版画も同様で、ここから来ている可能性もある。
- (5) Philippe Bordes, *La Déclaration gravée : esthétique et politique de l'encadrement*, dans *Les droits de l'homme et la conquête des libertés*, textes réunis par Gérard Chianéa, Grenoble 1988, p. 357. なお「ナンシーの事件については早川理穂「パリの民衆運動と暴力」山崎・松浦編『フランス革命史の現在』山川出版社、二〇一三年、六八頁以下を参照。
- (6) フランスの綴り字法のこの変化は『アカデミー・フランセーズの辞書』第六版（一八三五年）で確定するといえる。この辞書の書名自体もそれまでの *de l'art* の綴りは *français* と今日の綴りに変わった。また、たとえば *enfants* とそれまで綴られていた単語にを復活して *enfants* とした。この復活は一八一八年五月二八日の文法協会で採択された。さらに、一八一九年四月三日には、いわゆ

る「ヴォルテールの綴り字法」と呼ばれる二重母音の「*ô*」をすべて「*ai*」に置き換える決定をした。こういう綴り字法の変化（原語は革命）は共和七年の *Catneau* の辞書からなされていたようだが、逆に、シャトوبرリアンとかは旧綴り字法に固執する者もいた。Ferdinand Brunot (éd.), *Histoire de la langue française des origines à 1900*, t. 12 L'époque romantique, Paris 1927, pp. 537-538, なお一八〇四年のフランス民法典では français と表記されているが（たとえば三条）、三一九条などでは *enfants* のままである。

(7) 旧約聖書「出エジプト記」三四章。

(8) Paul Delvaux, *La controverse des droits de l'homme de 1789, apothéose des droits et bannissement des devoirs de l'homme ? Thèse de droit*, Paris 1985, p. 40. この英語訳では一七八九年八月二七日の日付になっていることに注意しておきたい。John Hall Stewart, *A documentary survey of the French Revolution*, New York 1951, p. 113.

(9) 辻村みよ子「人権の普遍性と歴史性」創文社、一九九二年、八八頁。田村理「フランス革命と財産権」創文社、一九九七年、一六、一一二—一二二頁。

(10) Stéphane Rials, *Textes constitutionnels français*, 2^e éd., Paris 2011, p. 3, n. 1.

(11) この第三条について、ムーニエの案が採択されたことなどを含め、「憲法」の正当性という問題意識からではあるが、ムーニエの主権論を詳述したものととして、波多野敏「フランス革命における「憲法」とその正当性」（二・完）『岡山大学法学会雑誌』六三巻一号、二〇一三年、九八頁以下がある。また、同「ジャン＝ジョゼフ・ムニエの憲法論」『広島法学』三七巻一号、二〇一三年は、一七八九年のムーニエの二つのパンフレット、すなわち「全国三部会についての新見解」と「フランスに適合する政府の検討」を紹介している。結局、同氏のスタンスは、後者の論稿の注一で同氏がムーニエ研究の基本文献としてあげている岡本明「ジャン＝ジョゼフ・ムーニエ (Jean-Joseph Mounier) の政治思想」『北陸史学』二七巻、一九七八年のムーニエ再評価の立場を継承して、とくに立法に関する国王裁可の問題は憲法制定には及ばない点を重視される。しかし、そもそも人権宣言のポスターにもあるよう

に、国王の「裁可」にあたるタームは憲法レヴエルでは *accepter* と別の法概念なのだから、この点は本文論稿次節のすくろく遊びの図の第六五項が参考になろう。なお、シイエス『第三身分とはなにか』岩波文庫、二〇一一年の訳注が裁可 (*sanction*) のことばの同時代の語義変化に注意をうながしている。

- (12) 『現代フランス語辞典【第二版】』白水社、一九九九年、一二三七頁。

- (13) アカデミー・フランセーズの辞書はインターネット上で見ることができ。 <http://artfl.atilf.fr/dictionnaires/ACADEMIE/PREMIERE/premiere.fr.html> なお、アレントが「はじまり」と「原理」との関連性のみならず同時性・同一性を、プラトンのアルケー論を引用しながら検討している。ハンナ・アレント『革命について』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、一九九五年、三三九頁。

- (14) 光文社古典新訳文庫のルソー『社会契約論／ジュネーヴ草稿』中山元訳、二〇〇八年、一八〇頁では「政治体の生命の原理は主権にある」と訳されている。

- (15) このロベスピエール人権宣言草案は河野健二編『資料 フランス革命』岩波書店、一九八九年、三七三頁以下に訳されているが、訳文は変更している。

- (16) ただし、主権の不可分割と一六条の権力分立との関係如何の問題はあるが、これはルソー『社会契約論』二編二章「主権は分割できない」が参考になる。

- (17) 澤登文治『フランス人権宣言の精神』成文堂、二〇〇七年、一七四―一七六、一八九、四〇二頁。フランス人権宣言には、このほか、使用されていない語として、「王」や「教会」などがある。

- (18) リン・ハント『人権を創造する』松浦義弘訳、岩波書店、二〇一二年、一二頁。Lynn Hunt, *Inventing Human Rights: A History*, New York 2008 (pbk), p. 24. なお、二〇一三年にはフランス語訳も出づる。Lynn Hunt, *L'invention des droits de l'homme: Histoire, psychologie et politique*, Préface d'Amartya Sen, traduit par Sylvie Kleinman-Lafon, Genève 2013, p. 30.

- (19) この「一般社会Ⅱ人」と「個別社会Ⅱ市民」の対比については、ルソー社会契約論のジュネーヴ草稿の一節「われわれは、市民となつてはじめて人となる」に注目する樋口陽一『一語の辞典 人権』三省堂、一九九六年、一七頁が意味深長であるが、ただ、原典のコンテキストは個別からしか一般のことは考えられないから、「わたしたちはまず市民であり、その後初めて厳密な意味での人間になるのだ」ということに留意しておきたい。ルソー前掲訳書三二八頁。
- (20) 同書、一二〇—一二二頁および原注(8)。
- (21) J.-J. Burlamaqui, *Principes du droit naturel*, Genève 1747, p. 63.
- (22) ハント前掲訳書、一〇二頁。
- (23) この辞典類を駆使し、とくに一般的国語辞典と法律用語事典に区分けして、当時の法的概念を検討していく手法はビエール・ボナンがおこなっていて、参考になる。ビエール・ボナン「人権を待ちながら—アンシャン・レジーム期の辞書における自由」石井三記訳、『名古屋大学 法政論集』二四八号、二〇一三年。
- (24) *Les mots de la Révolution*, préfacé par Isabelle Albaret, Paris 1987. ただし、筆者の数えたところでは、四一八ではなく、およそ三八〇である。これは新語が動詞の場合に、その過去分詞の形容詞もカウントするかどうかなどの数え方にもよるのだろう。しかし、本書は補遺だけを集めたということもあり、一七八八年の原典にあったアステリスクがすべて外されている。なお、Jean-Paul Andrieux, *Histoire de la jurisprudence*, Paris 2011, p. 82では、四一八の単語ではなく「四八一」となっている。
- (25) *Dictionnaire de la constitution et du gouvernement français, contenant la dénomination de tous les nouveaux officiers publics, les formes de leur élection ou nomination, leurs fonctions, leur traitement, leur costume, etc., les nouvelles institutions civiles, politiques, militaires, ecclésiastiques, judiciaires et financières, les lois de chacune des branches de l'administration de l'Etat, les droits et les devoirs des citoyens, la définition des nouveaux termes les plus usités, quelques-uns de ceux qui ne doivent plus être employés, etc.*, Paris,

chez Guillaume junior, Imprimeur, rue de Savoie no. 17, près le quai des Augustins. L'an 3^e de la Liberté Française. 筆者は本書をパリ
大学Cujas図書館貴重書室で参照したが、そこでの出版年の補足説明は一七九四年となっていた。しかし、これは共和三年と自由
三年を勘違いしたものであろう。本書一一五頁下から一二行目の文章では、一七九二年のことは未来形で書かれている。

(26) この序言の箇所のページは打たれていない。

(27) 以下、本『憲法事典』からの引用は本文中でおこなう。

(28) この部分は、一七八九年七月一四日のバステイーユ襲撃の報告を受けたルイ一六世が「暴動なのか」と問うたのにたいして、「陛下、革命です」と応答したエピソードを想起させる。なお、アレント前掲訳書六五頁以下も参照。

(29) *Archives parlementaires*, t. 29, Paris 1888 (réimpression 1969), pp. 266-267.

(30) なお、一七八九年八月封建制廃止の法令も議員が法令を知らせることが言及されていた。河野前掲編著、一〇四頁。

(31) これは、本来、一七九三年人権宣言であるべきなのだが、有名なほうの一七八九年のテキストを採用して、印象を強めている
のだろう。